

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成26年8月18日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科

職 名・学 年 博士後期課程3年

氏 名 林 慧 茹

助 成 の 種 類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	第10回国際健康経済学会大会・高齢社会の健康経済 10th World Congress Health Economics in the Age of Longevity: a Joint iHEA & ECHE Congress in Dublin, Ireland		
発 表 題 目	日本の介護保険使用者について、サービス使用、認知症と要介護度悪化の相 関性の研究 Association between long-term care service use, dementia, and the deterioration of care-needs levels among the elderly in Japan		
開 催 場 所	トリニティ・カレッジ・ダブリン (Trinity College Dublin)		
渡 航 期 間	平成26年07月12日 ~ 平成26年07月19日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して 下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	250,000円	
	使用した助成金額	250,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	学会参加登録料	70,000円
		航空賃・交通費	160,000円
学会期間滞在費の一部		20,000円	
当財団の助成 について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 本助成金を頂いたおかげで、学会参加費、旅費の一部に当てることができました。このような大きなサポートをい ただき、貴財団に深謝しております。本事業が今後も継続されることを願っております。		

国際研究集会発表助成・成果の概要

京都大学大学院・医学研究科・社会健康医学専攻
博士後期課程 3年 林 慧茹

【学会概要】

平成 26 年 7 月 13～16 日に、第 10 回国際健康経済学会大会・高齢社会の健康経済(10th World Congress Health Economics in the Age of Longevity: a Joint iHEA & ECHE Congress in Dublin, Ireland)がダブリンで開催された。

本学術集会は、世界健康経済連合 (The International Health Economics Association, iHEA)が主催する、世界最大規模の健康経済系国際集会である。世界的に高齢社会へ移行しつつある状況を受け、今年度は高齢社会の健康経済をテーマとして、多様な視点からの高齢社会に関連する研究が発表された。

【発表内容】

厚生労働省の調査によれば、近年、介護サービス利用割合が最も高いのは脳卒中被保険者であったが、利用割合の上昇スピードが最も速いのは認知症関連の介護サービスであった。65 歳以上の高齢者における認知症発症率の現時点における平均は約 15%であり、年齢を重ねるとともにさらにその発症率は上昇する。認知症は入院関連因子である一方、介護と医療の費用増加に関する強力な予測因子でもある。さらに認知症の重症度と悪化スピードは、入院および身体障害、死亡などに大きな影響を与える。認知症は現時点ではほぼ回復不可能な疾病であるため、介護保険を受けた後、いかに要介護度の悪化防止に努めるか、といったことが重要な課題になると考える。この研究の目的は認知症を持つ介護保険被保険者における要介護度悪化関連因子を探索・特定し、早期予防を可能とする政策の策定に貢献する情報を得ることである。

本研究では、2011 年 6 月の京都府介護保険データを用い、要介護 1 から 5 の利用者を対象とした記述統計と、要介護度悪化を目的変数とした多変量ロジスティック回帰分析を行った。性、年齢、要介護度、認知症の有無、種類ごとの施設サービス利用の状況を回帰分析の説明変数とした。

結果として、高齢、男性、低いベースライン要介護度、認知症診断を持つ、などが、要介護度悪化に関連があることを示した。さらに施設サービスを使うことと要介護度 1 から 4 の被保険者の要介護度悪化との間に、強い関連があることが明らかとなった。特に要介護度が低くなるほどこの関連は強くなり、要介護度 5 の被保険者の要介護度悪化と施設サービスの利用とには関連が見れなかった。しかし居宅サービスと地域密着サービスに関しては、逆に要介護度が高くなるほど、これらのサービス利用と要介護度悪化との関連が強くみられた。

このことから、現時点における要介護度を維持するためには、性、年齢、介護度及び認知症診断の状況によって、相応しいサービスプランを策定することが必要であることが示唆された。さらに、認知症の予防の重要性について特に注目すべきことが明らかとなった。

【学会発表の成果】

報告者にとって、今回が初めての海外で開催される国際学会への参加であった。このような大規模な学会に参加し自身の研究について発表することで、様々な視点からの意見やアドバイスを得ることができ、非常に貴重な経験をさせていただいた。普段とは違った観点からディスカッションをすることができ、異なるバックグラウンドを持つ研究者と議論することによって、データに対する新たな意見や着想を得ることができ、大変貴重な経験となった。

自身の研究を日本から発信するだけでなく、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカやアジア各国などの社会高齢化に関する現状を知り、各国における最新の研究知見を得、それらと照らし合わせることにより、今後の自身の研究に対する新しい発想の種を得ることができた。

学会では二日目の夜にギネスストアハウスで懇親会が開催され、各国の研究者と意見交換をすることができた。事前準備した発表の場だけでなく、こうした懇親会の席上で外国人と英語で議論することは、研究内容だけではなく、各国の研究事情や研究室の状況を知ることができ、大変楽しく有意義な時間であった。さらに、本学会には日本と台湾から数多くの著名な先生方が参加されており、懇親会などの場を通じてたくさんの貴重なお話を聞かせていただける、素晴らしい経験となった。

【謝辞】

このたび京都大学教育研究振興財団の助成により、世界最大規模と言われる国際健康経済大会に参加させていただき、発表の機会を得られたことに心より厚く御礼を申し上げます。この機会を与えていただいたおかげで、学会において自身の研究成果を海外に発信できただけでなく、世界中の優秀な研究者・若手研究者と出会い、有意義な交流と学びを得ることができました。

末筆ながら、京都大学教育研究振興財団の益々の御繁栄を心より御祈り申し上げます。